中山 美咲
NAKAYAMA Misaki

陶磁造形の作意と無作為 —陶造形の必須要素から見る陶の魅力についての考察— 作品「境界」及び研究報告書

Intentionality and Randomness in Ceramic Art: A Study of the Attractiveness of Ceramics from the Perspective of the Essential Ceramic Elements
Work “edge” and Research Report

工芸領域

「境界」“edge”
W330×D160×H330mm　6 個組 サイズ可変　陶　2023 年

はじめに

本稿は陶造形における必須要素について考察を行い、それらがどのように陶独自の魅力に関わっているのかを論考したものである。特に陶造形における「作家の作意」「陶の無作為」の 2 つについて、これらがどのように陶芸作品の中で相互に関係しあい、作品に魅力を与えているのか考察を行なった。最終的な目的としては、他分野の芸術にはない陶独自の魅力とは何か、そしてその魅力の根源は何かについて考察し提示することである。陶の領域には他の芸術とは異なる部分が確かに存在する。筆者は、素材を限定することから始まる陶には独自の造形と制作上の理論が存在し、そこから生まれる魅力があるはずであると考えた。

筆者は陶独自の魅力を生み出すために必要な要素として、「素材の選択」「土から陶へのプロセス」「作家の作意」「陶の無作為」の 4 つの「陶造形の必須要素」を定めた。陶作家はこの 4 要素について、造形を行う際に必ず意識しなければならないものと考える。

第 1 章　陶造形の必須要素

本章ではそれぞれの必須要素について解説した上でその妥当性を検討し、各要素の間にある関係性について考察している。

「陶造形の必須要素」とは、筆者自身が制作の中で感じたことや参考文献を元に考案したものである。作陶を行う者にとって普遍的な事項であることを基準として、4 つの要素を選定した。まず作陶において「素材の選択」は前提となるものであり、土という素材を制作の発端とすることから生まれる「土から陶へのプロセス」もまた欠かせない存在である。「作家の作意」は人間が “ものを作る” 上で消すことのできない要素であり、作家の手から離れる工程のある作陶においても必ず存在する。「陶の無作為」とは、焼成による変化等、作陶の工程の中にある “作家の意図が入り込むことのできない領域” を指す。土を扱う限りこれを無くすことは不可能であり、作家はこの扱いについて思考を重ねる必要がある。考察を経て、4 つの必須要素は作陶をする上で一つも欠くことのできない存在であり、相互に支え合いながら存在していると考えられた。

第 2 章　作家の作意と陶の無作為

作陶の主体である作家が持つ「作家の作意」と客体である土からもたらされる「陶の無作為」には、深い関係性があると考えられる。筆者は「陶の無作為」の領域を「作家の作意」が掌握することは不可能であるが、その領域を自身の制作の中でどのように扱っていくのかを選択する、という関わり方をしているのではないかと仮定した。これを明らかにするために、陶作家について「陶の無作為」を受容する作家と克服しようと試みる作家に分類し考察を行った。受容する作家として、小川待子と 8 代清水六兵衛を、克服しようとする作家として深見陶治と里中英人を挙げている。

各作家の調査を経て、各作家の「陶の無作為」に対する選択は “受容する” と “克服しようと試みる” の 2 つを極としてグラデーションのように分布するのではないかと考えた。「陶の無作為」は不可避の存在であるからこそ、作家は自身の作意を元に「陶の無作為」とどう関係性を結ぶのかを十分に思考し、選択をする必要がある。

第 3 章　自身の作品から見る作家の作意と陶の無作為

本章では、陶による制作者でもある筆者の実体験に基づき、「作家の作意」と「陶の無作為」の関係性が自身の中でどのように構築されているのかを述べた。

大学院で制作した《forest》と《melt》の 2 作品についてそれぞれ解説した上で、制作の中で筆者がどのように「陶造形の必須要素」を選択してきたのかをまとめている。その結果を元に第 2 章で挙げた 4 名の作家と比べ、筆者が「陶の無作為」を受容するのか、克服しようと試みるのか、2 極間のどの立場にいるのかを示した。実際に「陶造形の必須要素」に基づく自己分析を行うことで、この概念が陶作家の分析にも有用なものであると結論づけている。

第 4 章　修了制作報告

第 3 章での自己分析を踏まえ、修了作品である《境界》についての報告を行った。制作に至るまでの実験について解説した後、《境界》の制作工程について具体的に記述し、自身の制作実践のまとめとしている。

筆者は本制作において、制作者としての自己と土とを結ぶ紐帯として「熔解」の現象を選択している。本作品は、「陶の無作為」の領域に存在するこの現象と「作家の作意」の 2 つの境界について思考し、作家である自身が選択した果てに生まれた作品となった。

おわりに

本稿の目的は、筆者の提案する「陶造形の必須要素」について考察・検証を行うこと、続いて、その中の「作家の作意」「陶の無作為」の相互関係について考察を行うこと、それらを元に陶独自の魅力とその根源を探ることであった。

まず参考文献に基づく研究を通じて、「陶造形の必須要素」は妥当であり、有用な提案であると結論づけた。その上で、この 4 要素は相互に関係を持っていることが判明した。「素材の選択」「土から陶へのプロセス」は「陶の無作為」を引き起こしながら、作家に “選択・実行・検討・再選択” のサイクルを求める。作家はこれらを「作家の作意」を元に思考し、選択を下していくのだ。特に「作家の作意」「陶の無作為」の間には、作家が「陶の無作為」の領域に発生する要素を “受容する” のか “克服しようと試みる” のかを選択するという関係があり、陶作家はこの 2 極の間に分布すると考えられた。

そして陶独自の魅力は、「陶造形の必須要素」全てを十分に満たすことで生み出される。作品にある要素全てが、偶然に得られた結果を含むとしても、最終的に作家の思考を経て選択された果てにある場合、そこには必然性が存在する。必然に満ちた造形というのは美しいはずであるという考えの元、そこが陶独自の魅力なのだと結論づけている。